

ヨハネによる福音書 20 章 24 節－29 節
「見ないのに信じる人」

《1》

主イエス・キリストの復活の物語が続いています。復活の朝、主はマグダラのマリアに現れてくださり、その日の夕方、ペトロをはじめとした多くの弟子たちのもとを訪れてくださいました。

ところが、その時、十二弟子の一人でディディモと呼ばれるトマスが、その場にはいませんでした。ディディモとは双子という意味です。トマスという名の人物はたくさんいたので、仇名が付けられていたのでしょう。

今朝は、このトマスが脚光を浴びています。もっとも、彼に対する普通の受け止め方はあまりよいものではないかもしれません。なぜなら、疑い深い人物だとレッテルを貼られてしまっているようだからです。それは不信仰だ、ということでもあるわけですね。

しかし、本当に彼はそうなのでしょうか。まず、このときの事実を少し追っておきましょう。

イエスさまが来てくださったとき、そこにいなかったトマスに向かい、ほかの弟子たちが言います。「私たちは主を見た」。

トマスは、どう思ったでしょう。とても羨ましかったでしょうし、何と言っても悲しかったでしょうね。ああ、どうしてあの時、居合わせなかったのだろうか……。

トマスはなぜその場になかったのでしょうか。何もわかりません。ヒントらしきものもないので、まったくの推測をするしかありませんが、——ほかの弟子たちは皆、ユダヤ人を恐れて部屋の中に閉じこもっていたのに、トマスは外にいたわけですね。

ペトロたちは、主の墓が空だったと言っているし、マリアに至っては復活の主にお会いして、主がこの後、天の父のもとに上られると言われた、とのことだし、一体何がどうなっているのか、よくわからない。それで、状況を偵察に外へ出て行った、とも考えられそうです。

いずれにせよ、自分だけ幸いな時を逃してしまった。こう感じて、彼は悔し紛れに、言い放ったのでしょう。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をその脇腹に入れてみなければ、私は決して信じない」。

この発言によって、彼は疑い深い人物だとされてしまった。あるいは、これは好意的な見方になるのかもしれませんが、いや彼は合理主義者だ、実証主義者だ、というような言われ方もします。

しかし、どちらも違うでしょう。疑い深いでしょうか？ 少なくともほかの弟子たちはどうだったでしょうか。皆、イエスさまを見るまでは主の復活を疑っていました。マグダラのマリアも同じです。全員、主にお会いしたから、それで信じている。トマスだけが疑い深いではありません。皆、疑い深かった。しかし、主にお会いして、信じた、復活を、復活の主を。

また合理主義とか実証主義というのは、要するに自分の目で確と見たものしか信じ

ないということでしょう。そうであれば、それはペトロやマグダラのマリアなど、ほかの弟子たちもやはり、同じです。トマスだけどうこう言う筋合いではないでしょう。

トマスの特徴は、疑い深いとか、実証主義者だとかいうことではなくて、むしろ正直で、熱心な人だったということです。

ヨハネ福音書で彼の名前がはっきり出てくるのは、ほかに2箇所あります。

一つは14章の初めのほう。訣別説教において、主は弟子たちに、ご自身父の家で、あなたがたのために場所を用意するために、そこに行かれるという話をされました。さらに、「私がどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている」と言われています。

これに対して、トマスは答えました。「主よ、どこへ行かれるのか、私たちにはわかりません」。

イエスさまから、私がどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている、と言われたなら、なかなか、私は知りませんとは、言い出しにくいでしょうね。知ってるふりをするかもしれない。しかしトマスは、知らないものは知らないと言っています。

これにより、イエスさまの有名な「私は道であり、真理であり、命である」という御言葉が導き出されることにもなりました。トマスは自分に、そして真理に対して、正直でした。

もう一個所が、11章です。主はヨルダン川の向こう側におられました。そのとき主が愛しておられたラザロが病気との連絡があり、イエスさまはラザロのいるユダヤへと向かわれます。ユダヤにはイエスさまを石で打ち殺そうとする者たちがいたのですが、それを物ともせず、主は行かれようとされる。

この時、トマスは仲間の弟子たちにこう言ったとあります。「私たちも行って、一緒に死のうではないか」。——イエスさまに対する熱心と忠実さがありますね。

このようなトマスです。彼はとても常識的で熱心な信仰者だった、ということです。

《2》

こうして一週間が経ちました。次の日曜日となります。この時も弟子たちは同じ家の中にいた。そして、トマスもいました。

やはり戸には鍵がかけてあったとあります。トマスはともかく、ほかの弟子たちは既に復活の主にお会いしているのに、なぜ戸を閉めているのだろうか。やはりユダヤ人たちを恐れていたのだろうか。復活の主にお会いしながら、それは違うのではないかと…、という疑問が湧きます。

これは恐らく、ほかの弟子たちはトマスに、自分たちと同じ体験をさせたいと願って、先週の日曜日と同じようにしていたのではないのでしょうか。鍵はかかっていたのに、主は何の支障もなく来られたんだ、という話もしていたことでしょう。

イエスさまはまた来てくださるのではないかと。そのことを弟子たちは願っていたでしょう。そして、自分たちと同じ状況で、トマスも主にお会いできるなら、それに越したことはない。そのようにして、主を心待ちにしていたのかと思います。

そこへ、主が来てくださいました。前のときと同じように、彼らの真ん中に立たれて、「あなたがたに平和があるように」と言われます。

さらにトマスに対して、彼が言ったとおりのこと——指を当てて手を見なさい、手を伸ばして脇腹に入れなさい——を言われました。

そして言われました。「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」。

これは勿論、直接的にはトマスに言われた言葉です。しかし、彼だけではなく、この時そこにいたほかの弟子たちに対しても、また、今の私たちに対しても、主はこのことを言われていると言えます。

信じることが大切である。それは、見るか見ないか、ということとは関係がない。見て信じるということもあるが、見ないで信じるということもある。どちらも同じように大切である。

そして、今はこのように見ることができるが、やがて見るができなくなる時が来る。たとえその時でも、同じように、信仰をもって幸いに生きることができる。このことを決して忘れてはならない。主が言われるのは、このことですね。

ですから、もはやトマスは、手を伸ばして主の脇腹に入れるなどということは、しなかったでしょう。そのことをしたかどうかは、何も書かれていませんが、絶対にそれはしなかったと言ってよいと思います。

《3》

トマスがしたことは、手を差し入れるようなことではなく、信仰告白でした。

「私の主、私の神よ」。旧約の時代以来、まことの神さまに対して、主の民は、私の主よ、私の神よ、と呼びかけてきました。

もっとも言葉そのものに即して改めて見てみますと、詩編の中で、「私の神よ」という言葉は結構出てきています。しかし、「私の主よ」といった言い方は珍しいものです。ざっと全編を通して見たところ、「私の主よ」という言い方が6回、「私たちの主よ」という言い方が2回の、計8回ありました（見落としがあるかもしれませんが）。「私の神、私たちの神」に比べて断然少ないです。「主よ」という言い方が圧倒的です。

しかし、言葉遣いはともかく、その思いにおいて主の民は、親しく主に、神である主に呼びかけ続けてきたわけです。

そして、それは勿論、まことの神さまに対する呼びかけです。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神に対して、そう呼びかけたのであって、人間には用いません。

トマスはここで、神でありながら人として来られ、十字架の後に復活されたイエス・キリストに対して、まさにアブラハムの神よ、というのと同じ思いを込めて、「わが主、わが神」と、信仰の告白をしています。——旧約の信仰者の祈りがすべて、この一点において集約される形での、「わが主、わが神」です。

共観福音書は、ペトロの信仰告白を載せています。マタイ福音書 16章 16節で彼はイエスさまのことを、こう告白しています。「あなたはメシア、生ける神の子です」。

今朝のヨハネ福音書におけるトマスの信仰告白は、これと並ぶ弟子たちの信仰告白の双璧と言ってよいものではないでしょうか。

トマスに対するイエスさまの、今日の最後の言葉は、「私を見たから信じたのか。見

ないのに信じる人は幸いである」というものでした。

これも、別にトマスに対する叱責の言葉のようなものではありません。

トマスも、ペトロたちも、やがて主を見ることはできなくなります。そして、代々のキリスト教会を通して、今の私たちに到るまで、その後誰も主を見ることはできなくなりました。

ですから、そのようなすべての信仰者たちに向かって、主は言われます。——あなたたちは私を見ることができなくなるが、見ないで信じる人は幸いなのだ。なぜなら、信仰は見るかどうかによって成否が左右されるようなことではないからだ。心から主を信じる。これです。これに尽きます。

それで、後にペトロは、このように語っています。ペトロの手紙一 1 章 8、9 節「あなたがたはキリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせない素晴らしい喜びに満ち溢れています。それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです」。

信仰による魂の救い。これは、主を見ることなくして、確実に与えられます。大切なのは、信じること、愛すること。

詩編全体の始まりである第 1 編の初めは、「いかに幸いなことか」と始まっています。ヘブル語原文では「幸いである、こういう人は」という言い方ですね。

どういう人が幸いなのか？ 2 節に「主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人」とあります。そのような人が幸いである。また 6 節には「神に従う人の道を主は知っていてくださる」とあります。

私たちは主イエス・キリストを見ることはありません。しかし、主の教えを愛し、絶えず口ずさんで、御言葉と共に歩むなら、それこそが幸いな道である。

その人の歩みをすべて、主はご存知です。この主にすべてを委ね、主と共に歩みゆく。そこに幸いがある。

主を見ることはなくとも、御言葉は常に私たちと共にあり、御霊が絶えず私たちを励まし、導いてくださいます。

信仰に生きることは、何と幸いなことかと思えます。

2021 年 7 月 11 日 朝拝

恵み深い天の父なる神さま、尊い御名を崇めます。

主イエス・キリストの尊い贖いと命へのご復活により、私たちはただ恵みにより、信仰を通して、救われています。それは神さまの賜物であり、すべてが神さまの愛によることです。

私たちには今、御言葉と御霊が与えられ、絶えず主と共にある、幸いな命と喜びのうちに生かされています。

信仰に生かされる幸いを覚え、これからもいよいよ主に感謝し、御名を喜び、誉め称えつつ歩みゆく者とされますように。

御手に委ねて、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

大場康司